医薬品卸編

震災被災地でも社会的使命果たす

医薬品卸業界は、流通改善に取り組んでいる。

医薬品においては「価格未妥結・仮納入」なる商取引が現在も行われており、価格を決めずに納品された商品を消費するという不可思議な状況がまかり通っている。また、つい最近までは「総価取引」も普通に行われていた。薬価が品目ごとに設定されているのに、全ての取引を丸めて金額を決めていた。これでは品目ごとの市場実勢価格を把握する薬価調査の信頼性に疑問を抱かせる。そこで「単品単価取引」を励行し、今は定着してきた。

このため、かなり以前から流通近代化、流通改善と名前を変えつつも、何とか通常の商取引にしようと努力してきたが、一向に成果を上げられずにいた。しかし、ここ数年は医薬品卸業の存在意義を示すため不退転の決意で取り組み、成果も見え始めた。

東日本大震災も大きく影響した。

未曾有の大地震は、経験したことのない巨大な津波を発生させ、数百㎞にわたる広範囲の沿岸部を呑み込んだ。さらに、福島では原発も被害を受け、先の見えない苦難の道が始まった。瓦礫がふさぐ道や放射線の恐怖に物怖じすることなく、医薬品の安定供給という使命を完遂した。有名大手物流企業が配送を止めた被災地でも、医療が行われ、必要とされる医薬品がある限り、どのような手段を使ってでも卸は必ず届けたのである。このことは多くのマスコミにも取り上げられ、それまで黒子に徹していた卸業の役割と社会的使命を果たした姿が広く国民に知られた。

流通改善に一定の成果

大手卸４社の売上高は８兆円を超えているが、各社の利益率は対売上比で小数点以下という散々な経営状況である。災害時にも医薬品を安定して現場へ届けるためには、常に最新の物流機能と設備への投資が求められる。卸企業側は適正な利益１％を目指して、自らの効率化も進めつつ取り組んでいる。

最近では、国際化の潮流に乗った動きや、オーファンドラッグ、スペシャリティドラッグの配送にも対応できる体制を整えた会社も出てきた。単に医薬品をローコストで運ぶ外国のディストリビューターとは違う日本の『医薬品卸』各社は、それぞれが多種多様な卸機能とサービスを発揮して、日本の医療に貢献している。

医薬品を扱うので、当然のごとく薬剤師も多数が勤務している。安心・安全・安定した医薬品流通を担う卸社員に高度で的確な情報を提供し、また教育するのも薬剤師の仕事である。薬が医療現場に届かなければ、現代の医療は成り立たない。薬と情報を届ける医薬品卸は、今後も社会に必要とされ続ける仕事である。

災害薬事コーディネーター養成を

「3・11」の教訓から提言

丹野氏

2011年３月11日午後、未曾有の巨大地震が東日本を襲った。まさにその時、宮城県石巻市の石巻薬剤師会医薬品センター薬局では、薬学生の実務研修が行われていた。奇しくも、その日の朝には大地震が来た際の対応を話していたこともあって、津波から逃れるため学生を連れて避難した。

薬剤師会の薬局は、市立病院の近隣にあり地域での拠点でもあったため、戻ろうと試みるも津波によって阻まれ、結局は全壊してしまった。薬剤師の死者・行方不明者11人という人的被害のほか、薬剤師会の97薬局中、全壊38、半壊31という壊滅的な状況になった。

それでも薬剤師は避難所等への巡回医療活動をすぐさま開始し、避難所等の衛生管理などに着手した。被災後、各被災地に派遣された災害医療チームには薬剤師が入っていなかったため、避難者の服薬していた慢性疾患医薬品やジェネリック薬を的確に判別することに混乱が生じた。この経験から、「災害医療チームに薬剤師がいないと困る」との認識が浸透していき、最近では災害医療チームに初めから薬剤師を入れる動きも出始めた。

石巻薬剤師会の丹野佳郎専務理事は、東日本大震災の貴重な経験から、薬剤師の活動として、①救護所・避難所で救護班へ助言②医薬品集積場での仕分け作業③病院・救護所での調剤④避難所への一般用医薬品の供給⑤避難所等での衛生活動（トイレ、飲料水、うがい、害虫駆除）――の５項目を挙げた。

その上で今回の経験を踏まえ、①被災地の薬局活用（外来用の備蓄が少ない病院の現状を踏まえ、薬局の備蓄も必要）②災害に強い薬剤師の養成③災害時医薬品の標準化と災害拠点病院採用薬の公開④ジェネリック薬の災害医療での活用⑤災害薬事コーディネーターの養成⑥的確な医薬品供給のために地元を熟知した卸への支援⑦お薬手帳の活用⑧メロンパンチーム（移動パン屋のような移動薬局）活動の展開――を提言した。

特に、災害医療に精通した薬剤師が必要であることを痛感した丹野氏は、「災害時には薬剤師に仕事の要請がくる。他の医療職と同じレベルで災害医療に対応できるスペシャリストとして活躍できるよう、しっかり勉強してほしい。また、ジェネラリスト薬剤師としても災害医療の知識を深めてほしい」と強調した。

震災で薬局（写真上）は全壊し、現在は別の地で業務をしている

薬学教育カリキュラムにも災害医療が設定される。地震大国日本では、どこでも震災に見舞われる危険性はある。薬学生は、すべての薬剤師に薬の専門家としての貢献が求められていることを忘れるべきではない。